

法学部における初年次教育改革

山 田 真 裕 (法学部・副学部長 (教務担当))

要 旨

本稿は本学法学部における近年の初年次教育改革とその現状について紹介する。法学部では2012年度から大きなカリキュラムの改編を行なった。中でも初年次教育が大きく見直された。初年次教育見直しの背景には、学力の大きく異なる学生を教えることの困難さの緩和や、留年率を下げることへの意識があった。

一般の初年次教育改革における大きな変更点をまとめると以下の3点になる。第一に法学・政治学の専任教員による通年必修の「基礎演習」を廃し、スタディ・スキルに特化した「スタートアップ演習」を春学期開講の必修科目とし、主な担当者も専任教員ではなく、スタディ・スキルを教えられる業者に外注した。第二に、1年目に行っていたTAの配置をやめ、2年目から全面的にLAに移行した。第三に、これらの変更を主導した拡大カリキュラム委員会がその後の成果確認と見直しを継続的に行うことで、1年生必修の演習の内容を学部として共有し、改善についての議論も学部として行えるようになった。

これらの諸改革についての現状ならびに成果と今後の課題などを本稿において検討し、今後の教育改善に役立てることを期したい。

1. はじめに

法学部は2012年度に大幅なカリキュラム改編を行った。その中でも初年次教育の改革は目玉施策と呼ぶべきものであった。本稿は法学部における近年の初年次教育改革とその現状について紹介することを目的とする。この目的のために本稿は以下のような構成をとる。まず次の第2節において、法学部における初年次教育の問題意識と背景について概説する。続く第3節では「基礎演習」から「スタートアップ演習」への移行について述べる。第4節では「スタートアップ演習」の運営について概説する。第5節では法学部における初年次教育改革に対する現時点での評価と今後の課題について述べる。

2. 法学部における初年次教育改革の問題意識と背景

2011年度まで施行されていたカリキュラムにおいて、初年次教育の中心となっていた科目は、「法学基礎演習」「政治学基礎演習」(以下、「基礎演習」と略記する)であった。これらは必修でありかつ通年4単位の科目として設定され、法学および政治学の専任教員が担っていた。通年科目の利点としては長期間にわたって教員と学生の関係を涵養できること、夏休みを利用すること

による教育効果が期待できることなどを指摘できる。高校とは大きく異なる大学において、これら基礎演習は1年生のホームページとして機能してきた。

しかしながら一方で、専任教員が担当することに伴い、共通の教科書もなく行われていたために、演習の内容がクラスごとに異なっており教育内容の基準化が困難という問題も抱えていた。また基礎演習の教室内においても学生の学力上の分散が大きいため、指導方針の構築に教員が悩むことにもつながっていた。このことはスポーツ推薦入試の導入など、入試形態の多様化によりさらに難しい問題となることが想定され、初年次教育の充実が留年率の悪化を防ぐためにも不可欠との認識が学部内で共有されていた。

こういった問題を含むカリキュラム全体の見直しは、拡大カリキュラム委員会で議論されてきた。カリキュラム委員会の本来のメンバーは、公法、私法、基礎法、政治、外国語という法学部教員が所属する各研究室から1名ずつ選任されてくる委員と教務主任（教務担当副学部長）である。拡大カリキュラム委員会はこれに各コース会議の代表者も加わる。コース会議とは、法学部がコース制を導入したことに伴い、各コースの科目設定や科目担当者決定などコースの運営にかかわることを議論するために設定された会議体である¹。

法学部におけるカリキュラム改編の議論の手順としては、まず拡大カリキュラム委員会が各研究室並びに各コースの意見を踏まえて議論を行い、その結果を答申ないし改編案として学部長に提出した。これを受け学部長は教授会で複数回の懇談機会を設定し、学部内の意見集約を行い、最終的には教授会として現行カリキュラムを承認した。次節ではそのカリキュラム改編のうち、初年次の演習についての変更について述べる。

3. 初年次演習の改編：「基礎演習」から「スタートアップ演習」へ

法学部の初年次教育において中心的な役割を果たしてきた基礎演習については、すでに前節において言及したような問題が認識されていた。これに対して拡大カリキュラム委員会は基礎演習を廃止し、春学期に全ての新生学生を対象とした「スタートアップ演習（2単位）」を新設し、そこでスタディ・スキルの習得を含めた共通の内容での教育を行うことを構想、提案した。複数のクラスで共通内容を教えることについては特定の専門を持った専任教員が必ずしも得手としないところであるため、外部委託が検討され、本学のキャリア教育などにおいて実績を持つNKSに講師派遣を依頼することとなった。また新生の学習の便宜を図るために、教員の分担執筆によって『法学・政治学学習ガイドブック』を編集し、全新入生に配布するとともに、「スタートアップ演習」においても教材として用いている。

このように1年生必修の演習を法学や政治学の専任教員が担当する通年4単位のものから、春学期2単位でしかも専任教員があまりかかわらない形にすることは、2年生以降の教育において不安がないわけではなかった。この点を補完するために、秋学期には選択必修科目として、1年生向けに専任教員が開講する演習科目として「基本演習」を置いた²。旧カリキュラムの「法学基礎演習」「政治学基礎演習」はそれぞれ前者が法律学科、後者が政治学科の学生のみ受講であったのに対して、「基本演習」においては所属学科にかかわらず学生はシラバスを見て履修申請する演習のクラスを選ぶ³。専任教員は、それぞれが1年生向けの演習としてふさわしい内容を自分の専門に即して考え、シラバスを作成する。スタートアップにおいてはどちらかという

と法学・政治学よりも、調べた上で読む・話す・書くといったスタディ・スキル向上に力を入れている。基本演習はその成果を踏まえた上で、より専門に寄った形のしかしあくまでイントロダクトリーな演習科目として用意されている。

次節では春学期開講の「スタートアップ演習」の運営について紹介する。

4. 「スタートアップ演習」の運営について

4.1 クラス運営の概要

「スタートアップ演習」においては春学期前半を法学部が独自に用意したプログラムで行い、後半からNKS講師に委託して行っている。ただしすべてのプログラム内容を拡大カリキュラム委員会がチェックしており、NKSと定期的に議論を重ねた上で教育内容や教材について確認している。今年度行った14回の授業概要は前半が表1、後半が表2にまとめられている。まずは表1と表2の左半分にあたる授業内容について述べ、その後右半分に書かれているLA（ラーニング・アシスタント）の動きについて説明しよう。なお、LAとは「学部および全学で提供する導入科目等において学生の学修を支援するため」に任用される学部学生であり⁴、学部などの「科目提供組織が本学学部学生から選考し、採用する。」⁵と定められている。

スタートアップ演習の前半の6回（表1）について概観すると、第1回目のオリエンテーションについては28名の専任教員がそれぞれ1クラスずつを受け持ち担当している。2回目、3回目は学科別に学生を教室に集めた講義形式で、「法学・政治学リテラシー」と題して、法律学科および政治学科の学びについてガイダンスを行なっている。ここでは先述の『法学・政治学学習ガイドブック』を教材として用いている。その際に受講生にノートを取らせ、それを後半の授業において検討するようにしている。4回目は図書館において情報検索を学ばせるとともに新書などを借りさせて、その要約を課題として課している。第5回、第6回については留学を含めたキャリア形成を意識させるためのガイダンスにあてている。

後半の8回についてはNKSから派遣された講師が各クラスで指導に当たる。表2は今年度の内容であるが、これは昨年度と比較してよりライティングに力を入れる方向で変更がなされている。この変更は昨年度の拡大カリキュラム委員会において前年度のスタートアップ演習についての検討を踏まえて議論した結果である。

第7回においては、前半の第2、3回で学生自身がとったノートを教材として、ノート・テイクのノウハウについて学ぶ。第8回は講師が示した新聞社説を学生が要約したものが検討される。第9回では図書館における文献検索の際に選んだ新書について課題として受講生に課された要約を検討する。その後、法学部の学びについての理解を深めるために、受講生は法学部についてのパンフレットの作成が課されている。これについては課外でのグループ・ワークを前提としたもので、授業時間外に学生が集まり議論しながら作ることとなる。第11回から13回はスピーチの演習にあてている。第11、12回は各クラス内での作業となるが、第13回は大教室に全員が集まったのコンテスト形式で行われた。この審査には表2で示したように複数の教員が加わっている。第14回は授業全体の振り返りとして設定されている。各回の授業における資料の配布にはLUNAを活用した⁶。

表1 授業の概要①【前半KG：1～6回】

前半授業：KG 自前			LA 研修・業務		
・大学で学ぶ上で必要な基礎知識を身につける ・大教室やクラス別など回によってさまざま			・大教室での授業補佐（コメント回収や選定） ・後半授業に向けた各種研修		
回	内容	担当	LA 通信	業務・研修内容	
1 4月上旬	オリエンテーション *クラス別小教室	専任教員28名	LA 通信 (創刊号)	研修 業務	今後の業務説明など 1年生向け履修相談 (授業開始後3日間：延73名参加)
2 4月中旬	法学・政治学リテラシー① *大教室(学科別)	法律：大西邦弘教授 政治：山田真裕教授		業務	座席誘導、見回り、 資料配付・回収など
3 4月中旬	法学・政治学リテラシー② *大教室(学科別)	法律：岡野祐子教授 政治：山田真裕教授	LA 通信 (第2号)	業務	座席誘導、見回り、 資料配付・回収など
4 4月下旬	文献情報検索の仕方 *クラス別小教室	大学図書館	LA 通信 (第3号)	研修	NKS 講師との顔合わせ
5 5月上旬	キャリア・留学ガイダンス *大教室×2	キャリアセンター 国際連携機構		研修	LUNA 操作講習
6 5月中旬	キャリアガイダンス② *大教室	法学部卒業の 現役弁護士など		業務	講師誘導、写真撮影、 資料配付・回収など

表2 授業の概要②【後半NKS：7～14回】

後半授業：NKS 提供				LA 業務	
・「読む・書く・話す」を中心に。(特に「書く」ことにフォーカス) ・複数の課題を求め「授業時間外学習」を促進(個人・グループ)				・50名演習クラスに常時2人を配置 ・授業時間内・授業時間外学習をサポート	
回	内容	提出課題	担当	LA 通信	業務内容
7 5月下旬	論理性を身につける①「整理」 (ノートテイクを整理要約)	第2・3回目 目のノート	NKS		自己紹介、LA タイム講評、 グループワーク補助
8 6月上旬	論理性を身につける②「記述」 ◆新聞社説の要約発表	新聞社説 要約	NKS		グループワーク補助、 LA タイム講評など
9 6月上旬	論理性を身につける③「記述」 ◆本の要約・講評を相互評価	新書要約	NKS		グループワーク補助、LA タイム講評、 新書優秀作品の選定
10 6月中旬	論理性を身につける④「構想・構成」 (法学部パンフレット構想)		NKS		グループワーク補助、 LA タイム講評など
11 6月中旬	グループ内での発表演習 ◆各班のパンフレット全体発表	パンフレット (グループ)	NKS		LA タイム講評、授業外学習サポート LUNA での質問受付
12 7月上旬	スピーチ演習 ◆クラス代表選出	スピーチ文	NKS	LA 通信 (第4号)	LA タイム講評、 クラス代表者とスピーチ練習
13 7月上旬	スピーチコンテスト *大教室×2 ◆クラス代表者による発表		NKS *法学部		スピーチ審査員
14 7月中旬	授業の振り返り *中教室×5(講師別)		NKS		授業まとめ補助 (同日夜に反省会実施 於関学会館)

*教員審査員：富田宏治、山田真裕、渡邊力、原田剛、守屋浩光、長岡徹

4.2 LA の業務とマネージメント

こういったクラス運営において講師を支える役割を LA が担った。LA は基本的に各教室に2名が配置され、講師と学生を支援することが求められている。LA たちは前半においては大教室での講義に際し授業補佐にあたりるとともに、後半に向けた研修を受けた。この研修内容は教務担当副学部長である私が法学部職員の助言に基づいて定め、実施には職員2名があたった。LA たちは研修の合間に、1年生たちに対する自己紹介のための「LA 通信創刊号」をまとめた。また、4月第1週の履修科目申請期間においては法学部1階のロビーに LA が滞在するスペースを設置

表3 ラーニング・アシスタント (LA) 活用の考え方

これまで (～2013年度)		TA/LA 体制	ねらい	効果●と課題▲	
KG 自前	1 ～ 6 回	大学で学ぶ上でのガイダンス (大教室：②③⑤⑥⑥) ①オリエンテーション ②③法律/政治学リテラシー ④文献検索 (図書館協力) ⑤キャリア説明 (キャリア協力) ⑥⑥法務等説明会 (OB 弁護士など)	LA (Ⅱ種) 4名採用 *②③⑤⑥⑥の計5回に 全員を配置。 【人件費概算】約4万円 1人あたり 約1万円	・大教室での私語・居眠りを抑制する。 ・資料を円滑に配布・回収し、出欠管理を行う。	●最小限の人員で最低限の業務を遂行。 ▲Ⅱ種のため授業時間外の業務が出来ず、コメントシートの整理や出欠管理は結局事務局が担当。
NKS 提供	7 ～ 14 回	読む・書く・話す 初年次教育 (演習教室：1クラス約50名×14) ⑦⑧コミュニケーション ⑨⑩ロジカルシンキング ⑪⑫グループディスカッション ⑬プレゼンテーション (クラス) ⑭アイデアコンテスト (全体)	TA 14名採用 *⑦～⑬の計7回、各クラスに1人を配置。 【人件費概算】 約29万円 1人あたり 約2万円	・1人の講師で60名の演習を担当するのは大変なので、TA がサポート。 ・経験豊富な TA がディスカッションに加わることで授業を活性化。	●私語・居眠りの抑制には一定の効果あり。 ▲講師が期待する役割と TA のノウハウがミスマッチ (専門外を求められることも)。 ▲年代が離れているため受講生と馴染めず。メンター指導が十分に機能せず。 ▲講師と TA とのコミュニケーション不足。
		人件費計 = 約32万円			
今回から (2014年度～)		LA 体制	ねらい	想定される 効果●と 課題▲	
KG 自前	1 ～ 6 回	2013年度と基本は同じ ⑤キャリア、留学説明 (キャリア CIEC 協力) を追加	LA (Ⅰ種) 16名採用 *前半～後半まで同じ LA がサポート。 *前半は単純業務の遂行と、後半に向けた研修を実施。 *後半は各クラスに2人を配置。(1人の LA あたり2クラスを担当) *優秀な LA を採用し、事前研修を徹底強化。	・1年生との距離を縮め、ピアラーニングを実質化。 ・優秀な LA を本気で育てて、1年生の刺激にする。 ・3年生もスタートアップ経験者なので活用しやすい。(後半は刷新するが) ・後半は1教室2人の LA を配置することでサポートを充実、安定化。 ・グループワークや時間外学習を活性化させる。	●前半～後半まで同じ LA が担当することで授業全体を把握できる。(今後授業内容を前半・後半でリンクさせていく予定) ●後半に向けて事前研修の時間が作れる、動機づけができる。(LA を鍛える時間を確保) ●前半をⅡ種→Ⅰ種にすることで、一歩踏み込んだ業務を任せられる。(コメント整理、出欠管理など) ▲LA 人件費が大幅に膨れ上がり、他の授業への LA 配置が手薄になる。 (2013年：4万円→2014年：65万円) ▲14名の優秀な LA (精鋭) が確保できるか。 ▲LA に積極的に授業に入ってもらうため、本人の履修と動機が上手く調整できるか不安。
NKS 提供	7 ～ 14 回	「書く」こと、授業時間外学習を重視した 初年次教育 ※input → output 形へ内容刷新 (演習教室：1クラス約50名×16) ⑦要約演習 ⑧⑨記述演習、グループで相互評価 ⑩法学部パンフ作り、グループワーク ⑪作成パンフレットを基に発表演習 ⑫スピーチ演習 ⑬スピーチコンテスト (大教室) ⑭授業の振り返り	【人件費概算】 約65万円 1人あたり 約4万円	法学部年間 LA 予算は105万円、LA 予算の約0.2%はスタートアップ演習で占める。	
		人件費計 = 約65万円			

し、1年生向けの履修相談にあたってもらった。後半においても LA は教室における講師の補助、受講生たちの授業時間外学習の支援などにかかわった。

このような LA を今年度の「スタートアップ演習」のために16名採用した。彼らはそれぞれ担当講師とチームを組み、事前の打ち合わせ、授業前後の相談に基づいて授業に参加した。LA の採用にあたっては前年度のうちから公募を行なったが、それだけでなく事務室より法学部の各教員に推薦を求めた。結果的に多様でありながら質の高い学生を LA として採用することに成功した⁷⁾。

2013年度以前の「スタートアップ演習」においては、表3にある通り LA と教学補佐 (TA) を併用する体制を取っており、かつ NKS が担当するプログラムは大学院生である TA が担当していた⁸⁾。しかしながら講師の期待するよき先輩としての役割が TA の実態からやや外れていた⁹⁾ことや、TA と受講生との関係構築の不十分さ、講師と TA のコミュニケーション不足などにより、TA からは「なにをしてよいかわからない」といった問題の指摘などもあった。これを踏まえて2013年度カリキュラム委員会は対策を協議し、TA ではなく学生である LA に全面的に切り替えることを決め、教授会の了承を得た。2014年度の LA となる2013年度当時の1、2年生は全

員「スタートアップ演習」を履修済み、経験済みであることもこの判断の背中を押した好材料であった。

しかしながら LA への全面切り替えは法学部にとっても初めての経験であったため、慎重かつ丁寧な運営を心掛けた。2014年新学期開始後すぐに採用した LA とのミーティングを私と職員で持ち、LA に期待する役割、業務、心得などについて説明を行った。その際 LA たちには教務担当副学部長および担当職員の役割が彼らのバックアップであること、トラブルもしくはその萌芽はもちろん、個々人の思うところ、気がついたことなどをいつでも気軽にわれわれに伝えてほしいと述べた。頼りになる先輩に依存したがる新生生がいるかもしれないが依存させてはいけないことは教務担当者から LA に対して特に強調した。人間関係においてはどこがトラブルの火種になるかわからない。場合によっては講師との間で信頼関係の構築に失敗する可能性もある。その際に LA たちにとって気軽に相談に乗れる存在であることが、われわれ法学部教職員にとってもっとも重要なことであると認識していた。教員に言いにくいことは職員に、職員に言いにくいことは教員に伝えてもらえればよい。とにかく LA が相談しやすい雰囲気を作ることを心がけたつもりである。

また LA 間の関係も重要と認識していた。何か問題が発生した際に、特定の LA にそれを抱え込ませることなく、速やかな解決に導くためには LA のコミュニケーションも重要である。こういった観点から私、職員の西台耕平、水山えみ、そして LA たちの連絡用メーリング・リストを設置した。非常にありがたいことに LA たちのコミュニケーション能力は高く、われわれ教職員があれこれ言うまでもなく、自分たちの連絡や意思疎通がうまくいくためにどうしたらよいかを自発的に考え、提案し、共有し、相互にサポートしあう雰囲気を巧みに醸成していた。

4.3 今年度「スタートアップ演習」についてのレビュー

今年度の「スタートアップ演習」について成果と今後の課題を整理していくプロセスは進行中である。法学部ではすでに「スタートアップ演習」全日程終了後に LA との懇談会を7月14日に、さらに NKS と LA を交えた FD 研究会を10月1日行なっている。これらを踏まえた今後の予定としては、拡大カリキュラム委員会でのレビューとそれに基づく来年度の教育内容の概要策定、NKS との打ち合わせによる細部の詰めということになろうと思われる。よって、とりあえずここでは現時点で明らかとなっている事実関係や課題を私見として整理しておくにとどめる。

まず単位取得状況及び出欠状況について確認する。図1の左側には成績分布、右側には不合格となり単位が取れなかった学生の成績と入試形態が示してある¹⁰。履修者の平均点は73.89、合格者平均点は77.26となっている。成績分布については4% (29名) の不合格者が出た。それ以外についてはS (90点以上) が8%、Aが31%、Bが32%、Cが25%となっている。成績評価については出席と提出物、演習への参加状況に対する講師の評価などが加味されている。

図1の右半分には不合格者の春学期取得単位と「スタートアップ演習」における欠席回数に記載してある。半数以上の16名が一けた台の単位しか取得できていないこと、1単位も取っていないものが6名いることがわかる¹¹。こういった単位取得が極端に少ない学生については個々に呼び出して面談するなど、状況把握に努めている。不合格者の入試形態を見ると、いわゆる学力試験を課している形態での入試による入学者の割合が高いことがわかる。ここで単位を取れなかった

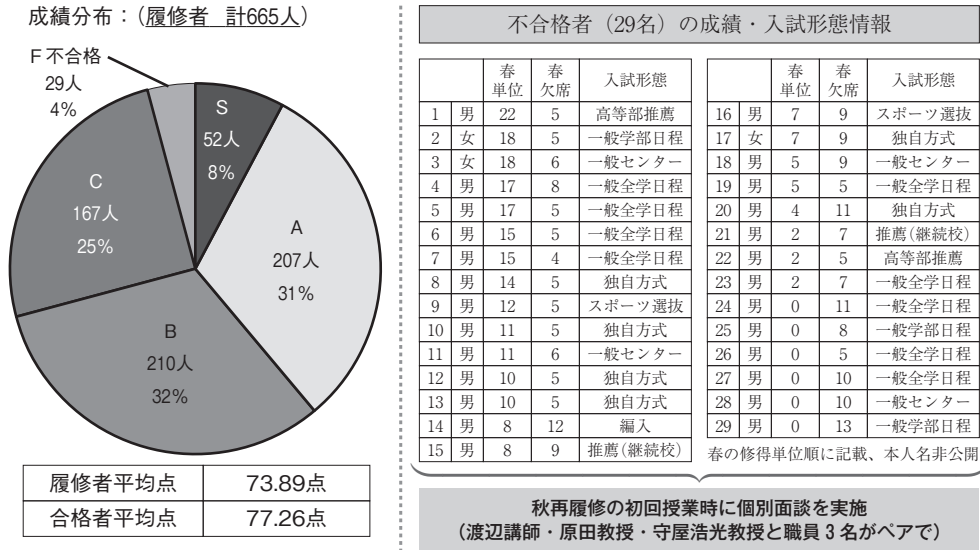


図1 成績評価分布と不合格者人数

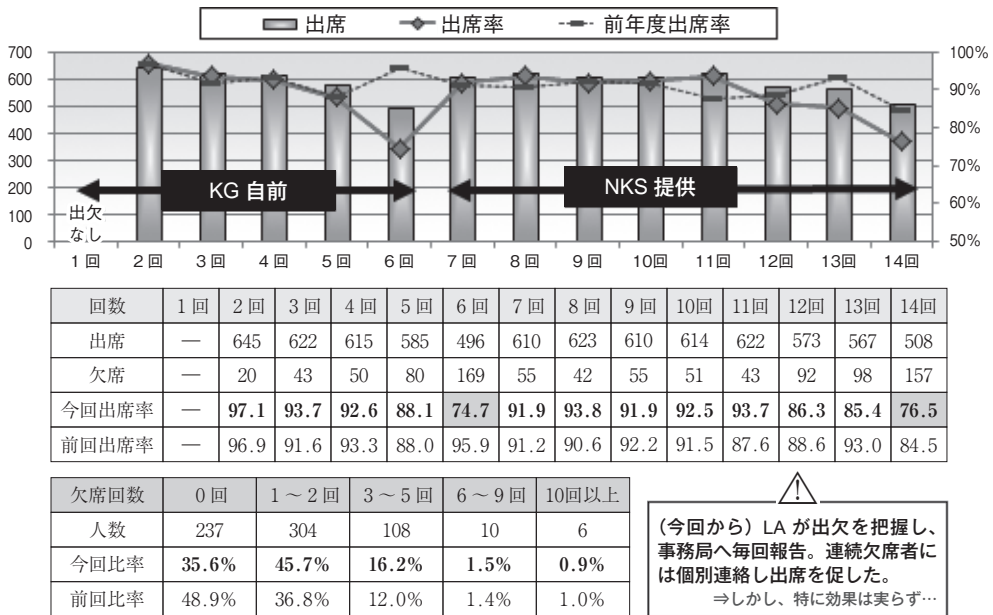


図2 授業への出欠状況

29名は秋学期に用意している再履修クラスに登録され、そこでの単位取得が期待される。再履修クラスについては後述するが、図に記載のある通り秋学期再履修の初回授業において、学生担当の教員と再履修担当の外部講師で個別面談を行いフォローアップしていく。

図2は授業に対する学生の出欠を示したものである。第6回(キャリアガイダンス2回目)、第14回(振り返り)における出席率が明らかに低いことがわかる。今後対策を検討すべき点である。欠席回数の分布をみると無欠席は35.6%と前回の48.9%より10ポイント以上低下している。今年度からはLAが出欠を把握し、事務局に毎回報告を上げ、これにもとづいて連続欠席者には

表4 受講生の「受講後評価（授業の振り返り）」集計結果（2014年7月14日実施）
 (1)「受講生の評価」3ヵ年比較（各年度「受講後の振り返り/アンケート」全クラス平均から）

	2014年度	2013年度	2012年度
授業に対する満足度は？	96.2%	94.9%	91.5%
新たな知見を得たか？	98.3%	95.4%	94.0%
この授業は必要だと思うか？	95.4%	94.2%	89.0%

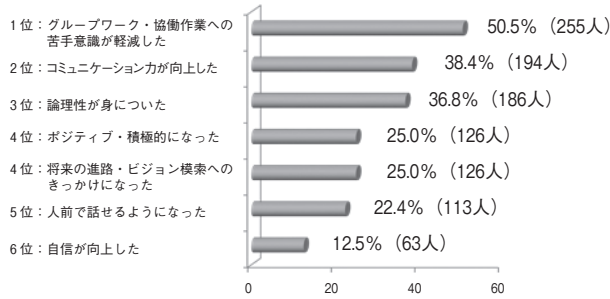


図3 問3. 授業で得たこと、自分で変化向上したと思うことは？

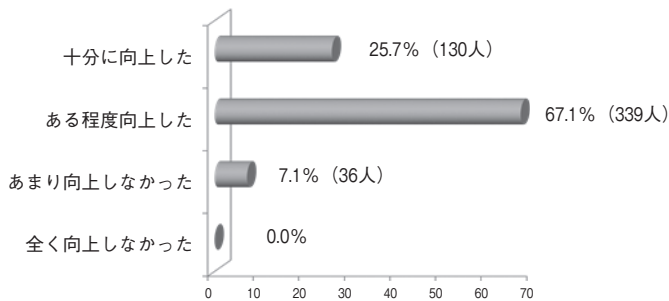


図4 問6. 「記述する力」は向上しましたか？

事務から個別連絡により出席を促すという対応を取ったが、出席率の改善に至らなかったため、さらなる対応を検討したいと考えている。

一方受講生の科目に対する評価は前年度に比べてわずかながら改善している。受講生からの評価については授業の最後に調査を行なった。その結果は表4にまとめられている¹²。「授業に対する満足度」「新たな知見を得たか」「この授業は必要だと思うか」などいずれも95%以上が肯定的な回答であり、その割合もわずかではあるが増えている。

授業を受けた上での「得たこと、変化向上したと思うこと」(図3¹³、複数選択)では、「グループワーク・共同作業への苦手意識が軽減した」が最も多く50.5%、次いで「コミュニケーション力が向上した」が38.4%、「論理性が身についた」が3番目で36.8%となっている。

今年度の教育内容においては前年度以上に「書く力」を鍛えることを重視したが、それに対する学生の評価は図4に示されている通り、おおむね肯定的なものであるといつてよい¹⁴。ただし、自由記述の中には「レポートの書き方や思考整理の方法はもともと知っていたので、大学でこんな幼稚なことをやるのは無駄だと思います。」といったものもあった。また講師からの見解としても、ライティングの能力にかなり大きな格差が見られることが報告されている¹⁵。何年もかけ

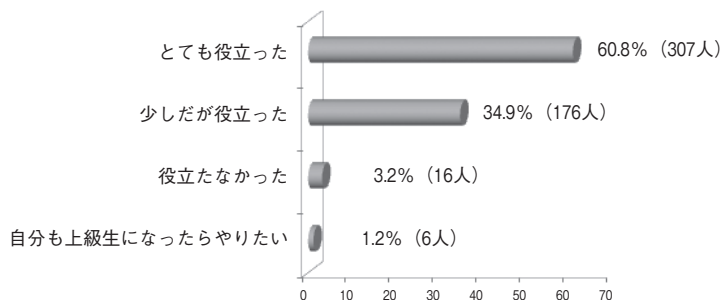


図5 問4. LAの存在は役立ちましたか？

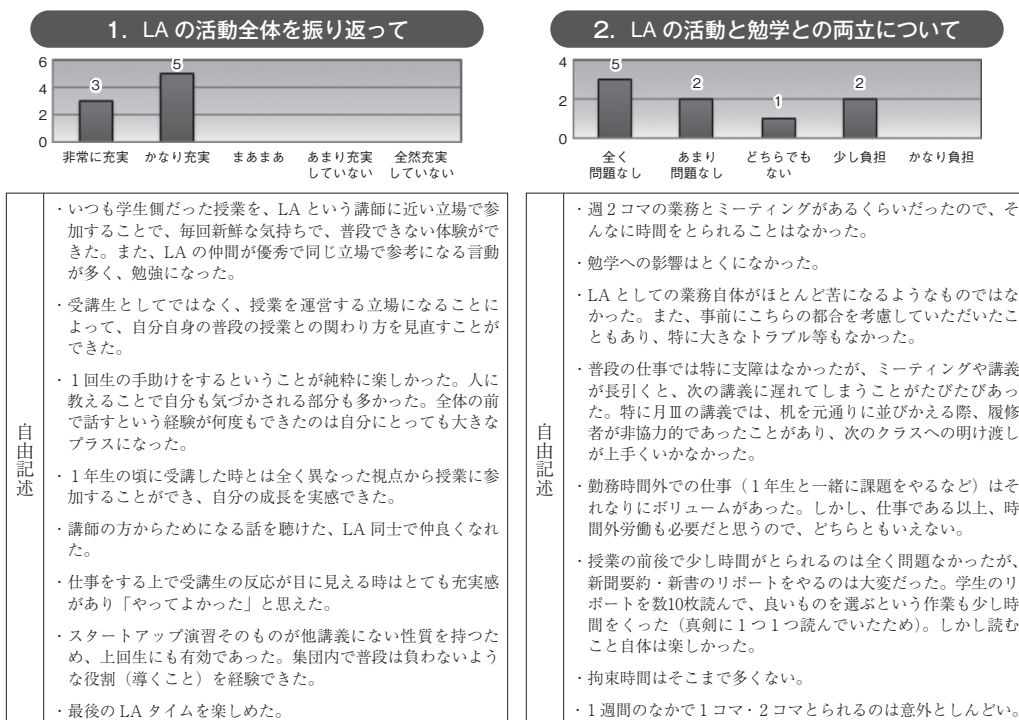


図6 LA振り返りアンケート（16名中8名から回答あり）※無記名回答

て作られてきたこうした格差を1セメスターで埋めることは当然不可能であるが、ある程度の作文力がないと論述式の試験が多い法学部において単位取得に苦労することは容易に予想できることであるため、今後も継続していく必要があるだろう。

LAに対する受講生の評価は高い。図5では「LAの存在は役立ちましたか？」という問いに対して60.8%の学生が「とても役立った」と回答したことを示している¹⁶。ただし残念なことに、「自分も上級生になったらやりたい」という回答は1.2%（6名）に過ぎなかった。

「スタートアップ演習」にLAを全面導入したのは、もちろん新入生にとって親近感を持ちやすい存在としてよい教育効果を期待してのことだが、同時にLA自身の成長や教育効果も期待してのことであった。よって「スタートアップ演習」の全講義日程終了後に、LAに対してアンケート調査を行なった。図6ではそのうちLAの活動全体を振り返っての充実度と、LAとしての活

動と勉学の両立について尋ねた結果を示している。回答してくれたLAは16名中の8名に過ぎないので十分な代表性はないが、充実していたという評価は出ている。負担については「少し負担」と答えた学生も2名いた。

図7は学生との接触と自身の成長について尋ねたものである。学生との接触については「まあまあ」という回答が最頻値である。一方、自身の成長については回答者全員が肯定的である。

図8はLAになることをほかの学生にも薦めるかという問いに対する回答で、これも肯定的である。これらの結果から新入生をサポートする立場にあるLA自身にとっても、LAとしての経験が有益であったと感じてもらえたようであり、担当者としては胸をなでおろしている。

またアンケートのほかに、FD研究会において、LAのうちから2名(3年生男子1名、2年生女子1名)に出席してもらい、LAとしての経験についてコメントしてもらった。LAの一人からは、自分たちが受けた「スタートアップ演習」よりも内容的に高度でタイトな内容ながら、新入生がよくついてきて感心したとのコメントがあった。また、教える側の立場に身を置くことによって、多くのことを学べたとのコメントもあった。

ただし学生がLAになることによって生じる大変さやリスクは不可避である。事例としてはLAを担当した学生より、『「スタートアップ演習」終了後に個人的に相談に乗ってもらいたいという依頼を受けたが、自分自身多忙であったので必ずしも対応できない場合があった』との報告を秋学期になって受けた。これについてはこちらで把握していなかったため、今後の対処として新入生からのコンタクトがあれば報告してもらおうこと、できるだけ事務室のほうで相談を引き受けるので、新入生にもそのように伝えてもらいたいことをLA経験者に連絡した。一度LAを引き受けた学生がその後も新入生に頼られることはLAに対する評価が高いことの現れではあるが、それがLAを務めた学生の負担に感じられるようであれば問題であるので、そのような措置をとった。今回特に問題となる事例は発生しなかったが、人間関係のトラブルは学生間に限らずどこでも起こりうるので、教務担当者としては常に即応できる体制を意識的に維持する必要がある。

FD研究会ではNKS講師からの感想もお願いした。LAの導入については一様に高い評価を受け、LAの能力の高さ、貢献度の大きさについての賛辞が聞かれた。新入生に対する評価としては、作文能力の分散の大きさが指摘され、優秀な学生にとっては退屈な教育内容となっている可能性が指摘された。また演習最終回の「振り返り」については前述のように学生の出席率も低く、必ずしも当初の期待と一致していないのではないかという意見もあった。加えて前半部の法学部で用意した内容と、後半部のNKS担当部分とのつながりについては、さらなる工夫が必要ではないかという意見も頂戴した。

以上の結果を踏まえて、今後の拡大カリキュラム委員会では次年度以降の方針について検討していくこととなるが、今年度についてはLA導入最初としては成功であり、さらなる検討を経て次年度にまた内容を改善させられるのではないかという手ごたえを担当者としては得ている。

一方で「スタートアップ演習」の単位を取得できずに再履修クラス入りする学生についても注意深く見守り、その修学を支援する必要がある。今年度春学期の再履修クラスは1クラスで、拡大カリキュラム委員会メンバーの一人が担当したが、全く出席せず事務室からの連絡や呼びかけにも対応しない、あるいは連絡がつかない学生も見受けられた。この対応も今後の課題である。

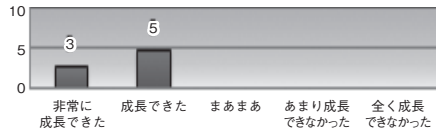
3. LA の活動の中で、受験生と接する機会はどのくらいありましたか？



自由記述

- ・昼休みやチャペルアワーに準備をしていると、少しずつ履修者の方から話しかけられることが多くなってきた。日常では顔を覚えられ、挨拶されることもあったが、質問を LUNA で受けることはなかった。
- ・授業中に接する機会はたくさんあったが、授業外で接する機会は全くなかった。
- ・積極的でも消極的でもない立場を目指したこともあり、多すぎず少なすぎない態度で接した。意欲のある学生からは自ら質問をしたりアドバイスを聴いたりしてきた。逆にこちらからアドバイスを伝える必要がある学生もいたが、過保護にならないように気を付けた。
- ・あまり積極的に声をかけられなかった。授業外ではあいさつ程度でそんなに関われなかった。
- ・学生側から話しかけてくる機会は少なく、自分から話しかけることが多かった。
- ・他 LA は自分よりも深く接していたようで、自分が至らなかった。
- ・授業の空きコマがほとんど取れなかったため、受講者がこちらにアドバイスを求めてくるのがほぼなかった。
- ・授業中と学内でのあいさつ程度

4. LA の活動を通して、ご自身の成長を感じる機会はありましたか？



自由記述

- ・前で喋るという機会をたくさんいただいて、スピーチ力がついた。また、教えるということで気づかされることもたくさんあった。
- ・人前で話すことを求められる機会が多くあり、その中で成長を感じられた。
- ・LA・事務・講師の3つの連携を組織として考えることで、“ほうれんそう”の大切さを感じることができたことがよかった。自分の未熟さも感じる事ができた。
- ・話をする練習と文章の添削で客観的視点を身につけられた。
- ・ファシリテーションの研修や、実際に授業補佐をしてみて、自然に流れをつくり、自分はそれを後押しするだけというのがどれほど難しいかがよくわかった。これは私にとって大きな成長だと思う。
- ・他の LA の方々は自分よりも優秀であり、また熱心な1回生とふれあうことで、自分の意識向上にもつながった。
- ・人前で話したり、授業中に学生がどんな風になっているかを気にしたりすることで、今までに無かった経験、考え方を持てた。
- ・2回生というあまり上回生に強くなるものと言えない立場で、いかに統率をとるかということは、非常に良い経験になったと思う。

図7 LA 振り返りアンケート (16名中8名から回答あり) ※無記名回答

5. スタートアップ運営の LA になることを、他の学生にも薦めたいと思いますか？



自由記述

- ・自分を成長させられるし、志の高い仲間とも出える。それに学内だと働きやすいと思う。
- ・負担はあるので、やるのであれば自分の成長や Mastery for Service の精神を持つ人にやってほしい。
- ・自分の成長に繋がる、先生たちの仲が深まる、LA 間で意識の高い人たちと交流でき、良い刺激をもらえる。
- ・非常に責任感とそれ以上にやる気が問われるので、ただのアルバイト感覚ではやってほしくないと思う。利他の精神で心から LA の仕事に興味がある、信頼できる人ならば薦めたいと思うが、大人の目から見るとどのように映るかが重要であると思う。
- ・あまりできない経験を積める
- ・自分のスキルアップにもつながり、人脈も広がる。さらにお給料までもらえるなんて、学生にとってここまで有り難いことはない。少し知名度が低いようなので、そこは積極的に薦めていきたい。
- ・学生生活の中であまり経験することのできない責任感を持ちながらの活動ができた。
- ・薦めたい気持ちはあるが、本人のやる気がないと難しい仕事だと思う。薦める理由は、普段はできない体験だから。

LAからの感想

自身も学生という立場でありながら、教授(講師)と学生の間をサポートすることは「見る側」、「受ける側」の両方の視点に立たねばならず、難しい部分もありましたが、その分広い視野をもって授業に参加することができました。

また、受講生にアドバイスや説明をする機会が多かったので、相手に物事をわかりやすく伝える力も身に付きました。なにより受講生の1回生が課題に向かって頑張る姿に刺激を受け、私も頑張らなれずとも思わせてくれました。

LA はサポートという立場ではありますが、結果的に自身の成長に繋がる部分がたくさんあり、この機会を与えて下さったことに感謝したいです。

図8 LA 振り返りアンケート (16名中8名から回答あり) ※無記名回答

5. 法学部における初年次教育改革の評価と課題

以上を踏まえ、法学部の初年次教育改革についての評価と課題を担当者の私見として記しておく。まず、もともと不統一な内容でかつそれぞれのクラスでどのような教育実践が行われているか、必ずしも十分に把握できないまま教育改善が個々の教員にゆだねられていた基礎演習を廃止し、「スタートアップ演習」とすることによって教育内容を標準化したのみならず、その内容について学部としてのコンセンサスを持って改善するサイクルが完成したことは大きな前進と考えている。新入生のパフォーマンスを全体で見守り、それとアドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーとの関連で考えられる体制を構築することに成功した。この体制の下で、教育内容の改善を検討していけばよいという意味で、法学部の初年次教育をうまく回していける環境が整ったと教務担当者として判断している。前節で述べた反省点は今後この体制の下で生かしていくことになるであろう。

それ以外の問題としては、再履修クラス存在を指摘できる。一度単位を落としてしまった学生もうまくフォローしてやれば再履修クラスで単位取得を果たしていくが、中には再再履修を重ねる事例がある。また他の単位も全く取得していない事例も散見される¹⁷。一定数が単位取得に失敗することは仕方ないかもしれないが、年ごとに再履修クラスの人員が多くなることも考えられるため、今後も注意を払っていく必要がある。

また今回必ずしも十分に検討できていないが、基本演習のパフォーマンスについて分析するための材料を今後揃えていく必要がある。この科目は1年生秋学期に配当されているが、これが2年時以降の学修にとってどの程度うまく機能しているかを確認することは今後の課題である。

〔注〕

- 1 現在法学部に存在するコースは、司法特修、司法、企業法務、国際法政、公共政策（経済学部と連携）、政治システムの6つである。
- 2 2011年1月28日における法学部教授会で審議決定済みの内容において基本演習の到達目標・教育内容は次のように定まっている。「基本演習では、法学・政治学を学ぶための基礎を習得し、春学期に身に付けたスタディ・スキルを応用・発展させることを目標とする科目として位置付ける。教育内容は法学・政治学一般のほか、広く社会科学・人文科学を内容とするものも含む。さまざまな社会問題と法学・政治学との関わりの考察を通じて思考能力を養う。個々の演習ごとに、教育内容の差別化を図る。学生の学習ニーズに応じた選択に資するよう、シラバス（特に副題・到達目標）に重点を置く学習内容を詳しく明示する」。なお、2014年度は28クラスを開設している。
- 3 最大10クラスまで優先順位をつけて履修希望が出せる。
- 4 関西学院大学学内規程「ラーニング・アシスタント（Learning Assistant, L. A.）に関する規程」（2012年6月8日理事会承認）第1条参照。
- 5 同規程第2条。
- 6 高等教育推進センター「LUNA 活用 News Letter」8月号参照。
- 7 学年（3年生を少し多めに取った）、性別なども含めて当初の期待以上にバランスの良い人選ができた。
- 8 TAについては関西学院大学学内規程「教学補佐（Teaching Assistant, T. A.）に関する規程」（平成12年10月13日理事会決定）を参照されたい。
- 9 たとえばTAをしている院生が本学法学部卒業生ではない場合も多く、その場合法学部生の実態については当然明るくない。

- 10 なお、以下の図表は特に断らない限り、西台耕平（法学部職員）が作成したものである。
- 11 これらについては個別に状況を把握し対処する必要があると考えているが、なかには本学に在籍しながら次年度に他大学への受験・進学を考えている、いわゆる「仮面浪人」もいるかもしれない。
- 12 NKS が作成。
- 13 NKS 作成。
- 14 NKS 作成。
- 15 たとえば、段落を意識せずにだらだらと文章をつなげる傾向などが指摘された。
- 16 NKS 作成。
- 17 少数ながら一定数の仮面浪人が存在すると推測される。